

# 言葉なき世界のエクリチュール<sup>1</sup>

ジョルジュ・ベルナノスの文学

中里 まき子

## 序

言語表現の限界や言葉の欠如といった意識は、世の古今東西を問わず、文学における主題のひとつとなっている。言葉が失われた、あるいは機能不全に陥ったという認識を契機としてエクリチュールを紡ぎ出す書き手が常に存在するのである。

例えば、2011年3月に発生した東日本大震災を題材とする俳句について、高橋睦郎は次のように述べる。

卑見によればわが国の詩歌のうち、9.11に最も目覚ましく反応したのは短歌。それに対し3.11に最も確かな反応を示しているのは俳句であるように思われる。その理由は俳句という世界最短の定型の含み持つ沈黙の量によるのではないか<sup>2</sup>。

これは、言い尽くせない喪失を心に刻むために、あるいは、3.11後に生じた政治的発言をはじめとする多様な言葉の奔流に抗うために、俳句の沈黙こそが有効とする見方である。

そして、言葉が厄介なものに思われる瞬間にも、人はやはり、言葉によって文学作品を生み出し、その状況を表現する。陸前高田の「奇跡の一本松」を念頭に、宮城の高校生（当時）が詠んだ次の短歌が示すように。

降りかかる言葉の数が重すぎてしおれていくのは松の木だけか<sup>3</sup>

本稿では、文学創作のこうした側面を、ジョルジュ・ベルナノス(1888-1948)の作品を通して掘り下げていく。まず、この作家が言語の喪失の意識に立ち

---

<sup>1</sup> 本研究はJSPS 科研費（課題番号JP26770116）の助成を受けている。

<sup>2</sup> 高橋睦郎、「季をひろう」、朝日新聞, be on Saturday, 2013年3月9日, e-7面。

<sup>3</sup> 宍戸汐理, (宮城県・名取高校), 佐藤道雅・東直子選, NHK ハートネット TV 「震災を詠む 2013」制作班監修, 『また巡り来る花の季節は 震災を詠む』, 講談社, 2014, p. 151.

至った経緯を論戦文『良識派の大恐怖』（1931）に読み取り、続いて、そうした認識から生み出されたエクリチュールとして、同時期に書かれた文学的エッセー『戻り異端で聖女のジャンヌ』（1929）と、小説『欺瞞』（1927）及び『歓び』（1928）を検討していきたい。

## 第一章 第一次世界大戦と言葉

ベルナノスの言語観の表明として頻繁に引用されるのが、1926年のインタビューである。作家は、小説第一作『悪魔の陽の下に』を「休戦協定の数ヶ月後に書き始めた<sup>4</sup>」こと、それが「戦争から生まれた本の一冊<sup>5</sup>」であることを述べた上で、第一次世界大戦が言語に与えた打撃を次のように語っている。

あの時、私たちのうち一体誰が、虚脱感を感じていなかったでしょう。[...] そうです！ あの時代に筆をとった人は誰もが、自らの言語を再び征服し、鍛え直さなくてはならないと感じていました。最も確かな言葉がいかさまでした。最も偉大な言葉が空虚で、手の中で砕け散ったのです<sup>6</sup>。

こうしたベルナノスの言語観は、1928年から構想され1931年に刊行された最初の論戦文『良識派の大恐怖』において、より具体的に述べられる。反ユダヤ主義者エドゥアール・ドリュモン（1844-1917）の評伝という形をとる本書が、ベルナノスの文学の研究において参照されることは稀である。しかしその結論部では、ドリュモンの生涯以上に第一次世界大戦以後の社会状況が論じられ、そこにはベルナノスの文学創作にも関わる考察が多分に含まれる。

例えば、上記インタビューにおける「最も偉大な言葉が空虚で、手の中で砕け散った」という見解については、次のように詳述される。

というのも、民主国家の戦争、人民の戦争、普遍的な戦争は、やはり普遍的かつ全世界的な言語を必要とした。その言語を形成するために、戦争は、霊的なものでも何でも強奪して、幼稚で悪賢い一種の形而上学を最高速で切り売りし

---

<sup>4</sup> Georges Bernanos, « Interview de 1926 par Frédéric Lefèvre », *Essais et écrits de combat I*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1971, p. 1039. 以下、本書を *EECI* と略記する。

<sup>5</sup> *Ibid.*, p. 1039.

<sup>6</sup> *Ibid.*, pp. 1039-1040.

た。そこから、権利、正義、祖国、人類、進歩という最も神聖な言葉が、家畜のように検印と識別番号を刻まれて出てきた。以来、私たちは、そうした言葉が同様の従順さでもって、アメリカ的所有欲と銀行の偽善的な平和主義とに仕えるのを見た<sup>7</sup>。

戦争によって失墜したこれらの概念のうち、ベルナノスが特に着目するのは「祖国」である。ベルナノスは、「祖国の概念が戦争から生まれたと主張するのはあまりに軽卒である<sup>8</sup>」と考え、さらに、「祖国の概念のみならず、ヒロイズムの概念が、戦争の犠牲となったように思われる<sup>9</sup>」と述べる。そしてその要因として、1914年8月以後、出版界が「兵隊さん (Poilu) という名のもとにある種の英雄像<sup>10</sup>」を作り上げたことを指摘する。五年間にわたって、大量の証言やインタビュー記事、書き換えられた兵士の手紙を通して、「兵隊さんは何も恐れない。その外見だけで、野蛮人やフン族やドイツ兵を恐怖で打ちのめす<sup>11</sup>」といった誇張や虚偽が喧伝された。こうした兵士のイメージは、父親と離れて暮らす少年少女の想像において、英雄の表象とともに名誉の概念を決定的に汚すものであり、それは、休戦直後に兵士の地位が急落したからなおさらであった。

ベルナノスがドリュモン論の結論部で自身の言語観を展開するのは、第一次大戦後の言葉が失われた状況においてこそ、ドリュモンの存在意義が増すと考えるためである。『良識派の大恐怖』の著者が呼びかける若いフランス人たちは、『ル・マタン』紙が報じたロレーヌの婦人の言葉——「ドイツ兵の遺体はフランス兵の遺体より臭い<sup>12</sup>」——が飛び交うような愚かさや憎しみの中で育ったため、社会に対し「深刻な不信感<sup>13</sup>」を抱いている。そんな若者たちに文章の正しい読み方を教える存在こそがエドゥアール・ドリュモンである。

1917年2月6日にレオン・ドーデは書いている。「眼力と類い稀な洞察力に恵まれた観察者、ドリュモンは、時代の読み方を私たちに教えてくれた」と。近い将来、年老いた師は私たちの息子たちの面倒も見てくれるだろう。読み方を教える。その才能を神は確かに彼に与えた。一行一行、すべてを説明したいとい

---

<sup>7</sup> Georges Bernanos, *La Grande Peur des bien-pensants*, *EECI*, p. 318.

<sup>8</sup> *Ibid.*, p. 319.

<sup>9</sup> *Ibid.*, p. 319.

<sup>10</sup> *Ibid.*, p. 320.

<sup>11</sup> *Ibid.*, p. 321.

<sup>12</sup> *Ibid.*, p. 323.

<sup>13</sup> *Ibid.*, p. 327.

う欲求、眼鏡越しに目を上げて、難解な文章の上に太い指を置きたいという欲求を持つ彼は、ペギーと同様、村の小学校教師なのである<sup>14</sup>。

ドリュモンは 1917 年に没しているが、ベルナノスは彼の生涯と著作が、若者たちに文章の適切な読解法を教示することを期待して、その評伝を執筆したようである。またここで、ドレフェス派の闘士であったシャルル・ペギー (1873-1914) とドリュモンとが並称されることから、ベルナノスが、親ユダヤ／反ユダヤという対立を超えた価値を追求していたことが示唆される<sup>15</sup>。

第一次世界大戦期における言葉の失墜をひとつの契機としてドリュモン論を執筆したベルナノスは、同時に、純粹な言葉、聖なる言葉を追い求めた。彼の文学テキストには、その探求の軌跡が映し出される。そうした観点から、第二章ではエッセー『戻り異端で聖女のジャンヌ』を、第三章では小説『欺瞞』及び『歎び』を読み解いてみたい。

## 第二章 言葉と沈黙：ジャンヌ・ダルク処刑裁判

『戻り異端で聖女のジャンヌ』(1929) では、1431 年のルーアンにおけるジャンヌ・ダルク処刑裁判が、少女の純粹な言葉と、裁判官たちの欺瞞的な言葉とが対峙するドラマとして提示される。

シャルル・ペギーへの賛辞で始まるこの文学的エッセーにおいて、ベルナノスが処刑裁判の被告として登場させるのは、ペギーが愛したドンレミ時代の「羊飼いの少女<sup>16</sup>」である。裁判当時、実際のジャンヌ・ダルクは 19 歳であったが、ベルナノスの「裁かれるジャンヌ」はもっと若く、小学生に比較されることもある。彼女は「火刑に処されることを大変恐れていたが、それ以上に嘘をつくことを恐れていた<sup>17</sup>」。それゆえに、裁判官たちから自説の撤回と異端放棄を執拗に勧められても決して応じることはない。大人たちの尋問に、ジャンヌは、「子供の愛らしい叫び<sup>18</sup>」、「清純な叫び<sup>19</sup>」で応じるのみである。ジャンヌの「聖なる言葉<sup>20</sup>」は、裁判官たちに衝撃を与えるもので

---

<sup>14</sup> *Ibid.*, pp. 327-328.

<sup>15</sup> ただし、ベルナノスがユダヤ人を拝金主義や近代化の担い手とみなし、批判的に捉えていたことは否定できない。

<sup>16</sup> Georges Bernanos, *Jeanne, relapse et sainte*, *EECI*, p. 26.

<sup>17</sup> *Ibid.*, p. 22.

<sup>18</sup> *Ibid.*, p. 28.

<sup>19</sup> *Ibid.*, p. 28.

<sup>20</sup> *Ibid.*, p. 30.

あった。

この勝利の言葉、この子供っぽい言葉、この永遠の幼年時代の言葉。それは、真夜中に摘まれ、降ったばかりの驟雨に濡れている、野生の匂いのする薔薇のひと束のよう！ その言葉は、あなたたち〔裁判官たち〕にはあまりに人間味があって、あまりに生き生きとしていて、それは、あなたたちの気分をあまりに残酷に傷つけた<sup>21</sup>。

五ヶ月に及ぶ尋問はジャンヌの魂を枯渇させ、徐々に言葉を奪っていくが、それは同時に、彼女の純粋な言葉に傷ついた裁判官たちが、迫害者へと変貌していく過程でもある。ジャンヌの魂の殺害が決定的となるのは5月23日のことである。この日、異端放棄を促す最後の説得のため、ルーアンの司教座聖堂参事会員ピエール・モーリスをはじめとする八人の判事がジャンヌの独房を訪れる。モーリスはジャンヌに、訓戒の文章を読み聞かせる。

以上の箇条に関して、諸博士は、汝が教会の教えに背き、その権威及び統一性に反する異端者であり、今日に至るまで信仰において危険な誤りを犯していると述べる<sup>22</sup>。

モーリスが発する言葉は、裁判を通して幾度も聞かされ、「あまりに馴染んだ、あまりに平板な言葉であるため、彼女にもはや退屈しか与えない<sup>23</sup>」。朗読が続く間、魂の死を迎えつつあるジャンヌは最後にもう一度、自分の生涯の輝かしい日々——軍馬での疾走、戦闘、軍事パレード、星空のもとでの野営——を振り返る。こうした生の経験に対して、裁判官たちの言葉はあまりに空虚に響く。この日、すでに声を失ったジャンヌの内的世界は、その視線の描写によってのみ伝えられる。ピエール・モーリスの訓戒の間、ジャンヌは彼の眼差しを十二回にわたって避ける<sup>24</sup>。そして「秘かに窓の外を眺め、天井の梁を数え、ため息をつく。退屈した小学生のように<sup>25</sup>」。最後に彼女は判事たちと「絶望的で無力な視線を、最後の別れの視線」を交わす<sup>26</sup>。

大人たちの言葉が少女の「魂の核心を、存在の原則を傷つけた<sup>27</sup>」結果、

---

<sup>21</sup> *Ibid.*, p. 30.

<sup>22</sup> *Ibid.*, pp. 34-35.

<sup>23</sup> *Ibid.*, p. 35.

<sup>24</sup> *Ibid.*, p. 34.

<sup>25</sup> *Ibid.*, p. 35.

<sup>26</sup> *Ibid.*, p. 36.

<sup>27</sup> *Ibid.*, p. 38.

彼女はもはや、「純粋な手つかずの言葉<sup>28</sup>」を与えることができない。ジャンヌがこうして精神的な死へと逢着する過程を描くベルナノスは、彼女の言葉に思いを寄せ、慈しみつつも、分量としては、大人たちの空疎で偽善的な発言のほうをより多く書き留めている。論戦文『良識派の大恐怖』において新聞等の誇張や虚偽を執拗に引用したように、ベルナノスは墮落した言葉を書き記すことに拘泥していたようである。「死の歌<sup>29</sup>」と形容されるピエール・モーリスの説教がブレイヤード版で三ページ<sup>30</sup>にわたって引用される以外にも、裁判記録<sup>31</sup>における判事たちの発言が大量に引用され、テキストのかなりの割合を占める。まるで失墜した言葉が真の言葉を抑圧し、排除するかのようである。この文学的エッセーに見られるエクリチュールの特徴は、ベルナノスの小説作品にも受け継がれる。

### 第三章 言葉なき世界：『欺瞞』と『歓び』

『戻り異端で聖女のジャンヌ』の核心をなす言葉の喪失の意識から、ベルナノスは同時期に二作の小説を生み出した。信仰を失った司祭セナーブルの絶望的な彷徨を描く『欺瞞』（1927）と、清純な若い女性シャンタル・ド・クレルジュリがセナーブルらとの対峙を経て死に至る『歓び』（1928）は、一連の物語を形成する。これら二作については発表当初より読解の難しさが指摘されてきたが<sup>32</sup>、この困難は登場人物のモデルを探ることによって多少は軽減されるかもしれない。セナーブルの人物像については、『フランスにおける宗教感情の文学史』等の著書のあるアンリ・ブルモン神父がその着想源であったとされ、シャンタルについてはベルナノス自身が、1925年に列聖されたカルメル会修道女テレーズ・ド・リジューとの類似性を示唆している<sup>33</sup>。しかし現実のモデルを探ること以上に、『欺瞞』と『歓び』の解釈は、『戻

---

<sup>28</sup> *Ibid.*, p. 39.

<sup>29</sup> *Ibid.*, p. 36.

<sup>30</sup> *Ibid.*, pp. 36-38.

<sup>31</sup> ベルナノスは1920年代に刊行されたピエール・シャンピオン版を参照している。

<sup>32</sup> 発表当時の受容については次の論考に詳しい。Joseph Jurt, « Les Lectures de *L'Imposture* en 1927-1928 », *Études bernanosiennes*, 15, *Lettres Modernes*, 1974, pp. 79-120 ; Joseph Jurt, « Les Lectures de *La Joie* en 1929 », *Études bernanosiennes*, 16, *Lettres Modernes*, 1977, pp. 91-120.

<sup>33</sup> 1928年1月の対談でベルナノスは次のように述べている。「あなたは聖女テレーズをご存知ですね。すでに亡くなっていますが、人々は彼女を褒めそやして、崇拝しています。そして、セナーブル神父がいます。私はこの不毛で、見捨てられていて、それでいて尊大な人物を、まさしく生まれつつある聖女に対峙させてみます。セナ

り異端で聖女のジャンヌ』との比較によって導き出される。すなわち、ベルナノスが描いたジャンヌ・ダルクと同様、シャンタルの聖なる言葉が周囲の大人たちを傷つけ、そのため大人たちは迫害者へと変貌する。そして少女は人々の贖罪のために死に至るのである。

### 欺瞞者セナーブル

シャンタルと大人たちとの関係は、この少女と司祭セナーブルとの関係に凝縮される。ベルナノスは、『戻り異端で聖女のジャンヌ』において裁判官たちの欺瞞をあぶり出したように、『欺瞞』では、信仰から遠ざかり、言葉を失った大人たちの姿を、セナーブルを中心に描く。そこでは、ベルナノスの言語への眼差しが、信仰をめぐる考察と連動して浮かび上がる。

小説『欺瞞』は、セナーブル神父が信仰の喪失を認識する場面から始まる。ある夜更け、習慣に基づいてペルニシヨンの告白を聴いていたセナーブルは、この若きジャーナリストの卑小な精神に自分の姿を重ね合わせ、そのことによって自らの欺瞞に気づく。数ヶ月前から増大してきた彼の不快感は、司祭である自分が、実は「背教者 (renégat)<sup>34</sup>」であることに起因していた。セナーブルはペルニシヨンを罵倒して追い返すが、彼の憤りは自分自身に向けられたものでもあった。いつものように祈りを済ませ、寢床で目を閉じたセナーブルは、信仰喪失の意識に苛まれて再び起き出すと、午前二時という時刻にもかかわらず神父シュヴァンスを呼び出す。「女中たちの聴罪司祭<sup>35</sup>」と呼ばれ、誠実ではあるが不器用なシュヴァンスは、「信仰を失った<sup>36</sup>」と言うセナーブルにすべてを神に委ねるよう勧めるが、セナーブルは怒りに任せてシュヴァンスを乱暴に突き飛ばしてしまう。シュヴァンスが去った後、拳銃自殺を試みて失敗したセナーブルは、自死の試みにも意味を見出せなくなり、夜が明けぬうちにフランクフルトへと出発する。国際心理学会において講演を行うよう頼まれていたのである。

セナーブルが内的な危機に直面するこの夜、言葉は二つの水準において失

---

ーブルが拒むのと同程度に完全に自己を捧げてしまう、いつも幸福な聖女に」。Georges Bernanos, « Entretien donné par l'auteur à « L'Avenir » », *Œuvres romanesques complètes I*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2015, pp. 831-832. (以下、本書を OCI と略記する。) シャンタルの人物像や言葉へのテレーズ・ド・リジューの影響については次の論考に詳しい。Guy Gaucher, « Bernanos et sainte Thérèse de l'Enfant-Jésus », *Études bernanosiennes*, 1, Lettres Modernes, 1960, pp. 5-44.

<sup>34</sup> Georges Bernanos, *L'Imposture*, OCI, p. 383.

<sup>35</sup> *Ibid.*, p. 390.

<sup>36</sup> *Ibid.*, p. 395.

われる。まず、信仰の喪失を自覚しつつあるセナーブルが「神よ」と呼びかけると、その声が消えるや否や、「かつてない沈黙、途方もない沈黙が鉛の塊のように彼に落ちてきた<sup>37</sup>」。こうして神が沈黙するとき、セナーブル自身の言葉もまた失われている。多数の著書で知られ、高名な歴史家でもあるセナーブルは、シュヴァンス神父の退出後、眠ることを諦め、書齋に戻って執筆に取り組もうとするが、いざ、「あれほど望んだ白い紙<sup>38</sup>」を前にすると、それを拒絶してしまう。セナーブルは、「立ったまま、虚ろな目をして、読むこともなく、おそろしくきれいで丁寧に句読点が打たれた、彼の大胆かつ繊細な文字で埋められたページを放心した指でめくっていた<sup>39</sup>」。そして、「乱暴な手つきで白いページを掴み、それを激した様子で屑入れに投げ捨てた<sup>40</sup>」。続いて彼は、「素早い指の動きで、手稿の残りを散乱させた<sup>41</sup>」。

彼に歴史家としての名声を与え、その自尊心を育み、全存在を支えてきた著作（言葉）を否定するとき、セナーブルは神の沈黙のみならず、夜の闇<sup>42</sup>によって追い立てられている。

彼はほとんど無意識的に、何であれ沈黙を破るものを求め、欲していた。もっともらしい口実、あるいは夜明けさえも。そして彼を取り巻く夜がこれほど濃く、黙っていたことはかつてなかった。夜は光輪からかうじて押し返され、あらゆる暗い隅で、カーテンの壁の陰で、注意深く待ち伏せし、外では絶対的な領袖として、放蕩も眠り込むこの時刻に、まるで人気のない通りや街に君臨していた<sup>43</sup>。

この夜、セナーブルが直面する欺瞞性の認識が彼の全存在を揺るがすとするれば、それは、この神父の虚偽が、幼年期にまで遡る徹底的なものだからである。早くに両親を亡くし、貧困と孤独のうちにあったセナーブルは、幼少期から「召命の悲痛な芝居<sup>44</sup>」を本能的に始め、ナンシーの神学校では頭角を現すために虚偽をさらに完璧なものとした。唯一サン・ジュネの司祭が彼

---

<sup>37</sup> *Ibid.*, p. 384.

<sup>38</sup> *Ibid.*, p. 419.

<sup>39</sup> *Ibid.*, p. 419.

<sup>40</sup> *Ibid.*, p. 419.

<sup>41</sup> *Ibid.*, p. 419.

<sup>42</sup> 小説の標題として、ベルナノスは執筆当初『闇』を検討していた。セナーブル（Cénabre）は「闇（ténèbres）」を、シャンタルの姓クレルジュリ（Clergerie）は「明るい（clair）」を想起させる。

<sup>43</sup> *Ibid.*, p. 419.

<sup>44</sup> *Ibid.*, p. 414.

に「抗い難い嫌悪<sup>45</sup>」を抱いたが、それを除けば、常に資質ある熱心な生徒とみなされた。そして、神学校でのセナーブルが、形式的であれ靈的生活を実践しながら、そこから何も汲み取らず、信仰の道に少しも入ることがなかったのは、彼が恩寵を類い稀な知力によって撥ね除けたためである。

しかしとりわけ彼の驚くほど意識された知力は、常に恩寵に対する最上の武器であった。残酷さが動機となっているようなある種の好奇心に駆り立てられて、彼の知力は、大変巧妙に隠された、謎めいた征服を成し遂げることにすぐに有頂天になった。そしてこの子供っぽい頭脳のうちに、すでに陰険で頑固な作品が生まれていた。それは毒された心にとって輝かしくも無益な書物であり、不実で、鋭敏で、非情なこの分析のモデルは、大変込み入った作業と着想に基づいていたため、騙される者には事欠かないと思われた<sup>46</sup>。

驚異的な知力はセナーブルを執筆へと向かわせたが、そのため彼は恩寵から遠ざかり、しかもそのことに気づく機会さえ奪われてしまった。この欺瞞者セナーブルが、神の沈黙のうちに自身の著作（言葉）を否定するに至る『欺瞞』第一部は、言葉の喪失を浮き彫りにしている。それに対し第二部では、空虚で欺瞞的な言葉の応酬が描き出される。

## ゲルーのサロン

第二部の大部分を占めるのは、著作家ゲルーのサロンに集うカトリック知識人たちの会話である。そこには、セナーブルに信仰の喪失を認識させた若きジャーナリスト、ペルニシヨンの姿もある。この人物に対しては、第一部で登場した段階から、ベルナノスによる冷やかな眼差しが注がれている。

ペルニシヨン氏は、保守的財界人に助成を受けた、社会主義を指向する急進的な雑誌に宗教時評を書いている。彼の魂はこの三重の曖昧さにおいて開花し、虫の忍耐と巧妙さをもって恥辱の限りを尽くす<sup>47</sup>。

ゲルーのサロンには司教エスプレットや出版界で暗躍するカタニ、教皇主宰枢機卿会議のかつての会員ジェローム、ラヴォワーズ・ド・デュラス子爵らが集うが、こうした知識人全般についても、「教会、政界、社交界、アカデミーの周縁に生きる著作なき作家、新聞なきジャーナリスト、司教区なき

---

<sup>45</sup> *Ibid.*, p. 415.

<sup>46</sup> *Ibid.*, p. 418.

<sup>47</sup> *Ibid.*, p. 362.

司教による非常に特殊なこの集団<sup>48</sup>と述べられる。こうして提示される「知識人」たちの特徴から、ベルナノスの小説のうち唯一パリを舞台とする『欺瞞』の背景に、1920年代のカトリック教会による第三共和政支持があったことが伺える。このことは、司教エスプレットの言葉——「遂に同意し、和解した教会と現代社会<sup>49</sup>」——にも端的に表れる。宗教、政治、ジャーナリズムに関わるこの世界では、人々の力関係の複雑な網目の上で、巧妙に均衡を保つことが求められる。それゆえに、権威的な神父セナーブルの庇護を失ったことは、ペルニシヨンの社会的地位を危うくするのである。そして、ペルニシヨンの失墜を決定づける言葉の応酬に、この集団の欺瞞性が刻まれている。

ある夜、ゲルーのサロンにおいて、ドイツから帰国したセナーブルとは会っておらず、今後も二度と会わないと言うペルニシヨンを前に一同が困惑していると、カタニ氏は、「才能豊かな若き同業者に好感<sup>50</sup>」を持っていると言いつつも遠回しにペルニシヨンを非難し始める——「例えば『オロール・ヌヴェル』紙のあなたの記事は、騒ぎになりすぎて、いただけません<sup>51</sup>」。するとジェロームらもカタニに同調する。反論するペルニシヨンに、カタニは、「私たちはあなたのためを思っているのですから、それは不当です<sup>52</sup>」と表面的には支援者を装いつつ、結局は近刊予定のペルニシヨンの著作が時宜を得ないものであると指摘する。しかし、実はカタニこそがペルニシヨンにこの著作の刊行を勧め、執筆に際して助言を与えた人物であった。ペルニシヨンがそう反駁し、作家志願の若者を食い物にしてきたカタニの過去を暴き立てると、カタニは、この若者に16,000フランを貸していることを暴露する。この応酬は、肺結核症を患うカタニが痙攣を起こし、血の塊を吐くまで続く。

サロンの常連たちの間に友情は存在しない。彼らは「取るに足らない事柄を計算する真に打算的な人間<sup>53</sup>」であり、ただ自分の地位を向上させるために他者を利用するのみである。この集団をベルナノスは次のように描写する。

彼らの人工的な小社会は、閉じた器の中で生息し、繁栄する […]。 […] この奇妙な連中は […] 宗教界と政界から等しい距離に生き、忍耐強く、入念に、

---

<sup>48</sup> *Ibid.*, p. 362.

<sup>49</sup> *Ibid.*, p. 477.

<sup>50</sup> *Ibid.*, p. 445.

<sup>51</sup> *Ibid.*, p. 445.

<sup>52</sup> *Ibid.*, p. 450.

<sup>53</sup> *Ibid.*, p. 457.

両世界を仲裁する。彼らの策略の常に秘密を求める性質ゆえに身を潜め、絶えず否認される非公認の調停役であり、状況と局面の生来の奴隷であり、恥ずべき扇動屋であり、疑わしい正統派である彼らは、何ひとつ固有のものを持たない。彼らの教義は勝者の側からそのまま借り受けたものにすぎないし、彼らの言語さえも、報告書や教書の文体を奇妙になぞり、ある種の文学が世に広めた滑稽極まる言い回しを加えたものでしかない<sup>54</sup>。

ベルナノスは、同時代の知識人たちの腐敗を、ここでもやはり言語の喪失へと帰着させる。そのため、『戻り異端で聖女のジャンヌ』と同様に『欺瞞』においても、空虚で打算的な言葉を執拗に書き留めている。さらに言語の喪失は、比喩的イメージによって表現される。すでに取り上げた口論は痙攣を起こしたカタニが血の塊を吐き出すことによって終わり、一同はゲルーのサロンを辞するが、その後、サロンへと引き返してきたペルニションと話すうち、今度は病身のゲルーが気絶し、その口からは、「意味をなす言葉ではなく、不明瞭な雑音が大量の唾液とともに<sup>55</sup>」吐き出される。

宗教界と政界との狭間に生きる、固有の言語を持たないこの集団は、絶望を、そして、死を招き寄せる。ゲルーのサロンで自己の社会的失墜を経験したペルニションは、その後、絶望のあまり自死を選ぶ。

### 物乞いと邂逅

こうして『欺瞞』第二部において、セナーブル神父の名声を支えてきた知識人たちの実態が浮き彫りとなった後、第三部では、第一部の夜と対をなす、もうひとつの絶望的な夜が描かれる。第一の夜から半年後、セナーブルは、信仰の喪失にもかかわらず司祭として職務を遂行している。生活が自堕落になったことを家政婦にだけは看破されつつも（「旦那様は不潔になられた<sup>56</sup>」）、彼は「司祭として生き、死んでいく<sup>57</sup>」決意をしていた。ところがある夜、サン・ジェルマン大通りで遭遇した物乞いと対峙を通して、再び精神の危機に直面する。第一の夜においてペルニションに自分を重ね合わせたセナーブルは、この第二の夜では老齢の物乞いアンブロワーズに自己像の反映を見出す。

この醜悪な浮浪者の周りに、少しの間、彼〔セナーブル〕の苦悶の断片的なイ

---

<sup>54</sup> *Ibid.*, pp. 459-460.

<sup>55</sup> *Ibid.*, p. 493.

<sup>56</sup> *Ibid.*, p. 517.

<sup>57</sup> *Ibid.*, p. 500.

メージが集まり、固定されたようだった。そしてさらに説明し難い現象によって、彼は、自分の最も内密な、言葉にできない思考のいくつかを、恥ずべき告白において認識したように思った<sup>58</sup>。

セナーブルはアンブロワーズにつきまとい、大金を支払ってでも「分別のある真正な言葉<sup>59</sup>」を引き出そうとするが、この老人からは作り話や冷やかかし、語呂合わせ—— «*Abjection, objection, projection*<sup>60</sup>»——しか出てこない。『戻り異端で聖女のジャンヌ』において裁判官の欺瞞的な言葉が執拗に書き出されたように、一時間に及ぶ対話での物乞いの発言は、彼の失神によって中断されるまで、その全貌が書き記される。意味のある言葉を発することのできない物乞いは、言語の喪失を体現する戯画的存在である。

### シュヴァンスとシャンタルの言葉

ベルナノスの小説世界において欺瞞者セナーブルの対極に位置するのが、シャンタル・ド・クレルジュリと、彼女の精神的指導者シュヴァンス神父である。この二人の人間的で内実のある言葉は、『欺瞞』第四部において描き出される。

病床にあるシュヴァンスは、目前に迫った死の予感を胸に、是が非でもセナーブルに再会したいと望む。それは、セナーブルから信仰の喪失を打ち明けられて以来の懸案であった。セナーブル邸に到着し門の鉄柵にしがみつくとシュヴァンスは、目眩のためか不意に地面に倒れ込み、その瞬間、神の存在を感じる。神に向かって「私を祝福してください […]」。最後のお別れの前に、このお恵みをお与えください<sup>61</sup>と繰り返し呼びかけていると、「魔法のようなひとつひとつの音節が、空気、光、熱、確信、生命とともに彼のうちに戻っていく<sup>62</sup>」のであった。それは「栄光とは無縁の貧弱な言葉であったが、それでも慈愛によって照らされて<sup>63</sup>」いた。

そしてこの神父は、死の間際にシャンタルから「歓び (*joie*)」を受け取る。錯乱の一夜が明けて意識を取り戻したシュヴァンスが、「死にたくない<sup>64</sup>」「死

---

<sup>58</sup> *Ibid.*, p. 522.

<sup>59</sup> *Ibid.*, p. 521.

<sup>60</sup> *Ibid.*, p. 523.

<sup>61</sup> *Ibid.*, p. 572.

<sup>62</sup> *Ibid.*, p. 572.

<sup>63</sup> *Ibid.*, p. 573.

<sup>64</sup> *Ibid.*, p. 585.

ぬのはつらい<sup>65</sup>」と言うのを聞いたシャンタルは、彼に優しく語りかける。

私はあなたに私が持っているものを差し上げます。[...] あなたがあれほど愛し、私がもう必要としないもの。私は二度とそれを必要としないでしょう。私の喜びを。あなたのお気に召していた、私の小さな喜びを。[...] この喜びを持つことができたのは、神様のおかげ、そしてあなたのおかげであったことを申し上げます。それを取り戻してください。ひと息に全部飲み込んでください。ただこの最後の小道を通るためだけに<sup>66</sup>。

二人の最後の対話は、シュヴァンスの次の言葉で閉じられる——「娘よ。私はお前が私に与えたものを受け取ったよ<sup>67</sup>」。

欺瞞者セナーブルが闇の中にいるとすれば、シャンタルは言葉とともに光をもたらし存在である。死に際のシュヴァンスが一時的に意識を回復するとき、医師の言葉の響きが消えてシャンタルの声だけが聞こえてくると、その「ただひとつの音調、少し単調だがえも言われぬ純粋さの響きは、朝の本物の光の中に溶け込んで<sup>68</sup>」いく。シュヴァンスが没した後、唯一の光として残されたシャンタルが、セナーブルら欺瞞の側にいる人々と対峙するのが、続く小説『喜び』である。

### 聖女シャンタルと迫害者たち

ノルマンディー地方レーニュヴィルにあるド・クレルジュリ邸で展開するこの小説は、8月のある一日を語る。主人公シャンタルは17歳の若い女性で、子供のような純粋さを保っており、そのことに自覚的でもある。

私には、ひとりの大人として振る舞い、この世の中でわずかな場所を占め、正当な利益を守りつつ、同時に、喜びや苦悩や死といった本質的で基本的な事柄には、子供の眼差ししか向けないということが可能であるように思われます<sup>69</sup>。

『喜び』では、五人の大人たち——アカデミー入りのために権力者との再婚を画策するシャンタルの父ド・クレルジュリ、シャンタルの祖母「ママ」、高名な精神分析医ラ・ペルーズ、ロシア人で麻薬中毒の運転手フォードル、そしてセナーブル神父——がそれぞれに、シャンタルとの交流を通して自

---

<sup>65</sup> *Ibid.*, p. 586.

<sup>66</sup> *Ibid.*, pp. 586-587.

<sup>67</sup> *Ibid.*, p. 588.

<sup>68</sup> *Ibid.*, pp. 581-582.

<sup>69</sup> Georges Bernanos, *La Joie*, OCL, p. 669.

己の暗黒面を直視することになる。その状況をめぐって、父親ド・クレルジュリはシャンタルを次のように問いつめる。

前にも言ったように、日によっては、お前の希望、快活さ、突拍子もない安堵感が、私に我を忘れさせ、激高させることがある。これは下劣な感情ではないだろうか。何よりも下劣な感情だろうが、えっ？ お前だってそう思っているに違いない。さあ、答えてくれ！<sup>70</sup>

そして精神分析医ラ・ペルーズは、シャンタルとの対話の最後に、屈辱の涙を流しながら言う。

考えてもみてください。しばらく前から、私は、あなたにお見せできるような人生の瞬間を、ただひとつでも探し出そうとしているが、無理なのだ。愚かな言動、卑劣な言動しか見つけられない<sup>71</sup>。

ド・クレルジュリ邸に居住する人々にとって「シャンタルのとても単純で明快な優しい声、思いがけず聞こえてくる笑い声は、ほとんど残酷なまでに響き、わざとらしく思われた<sup>72</sup>」。そして彼女の聖性によって傷つけられた大人たちは、ジャンヌ・ダルク処刑裁判の判事たちのように、迫害者へと変貌する——「目に見えない網が、素晴らしい獲物の上に閉ざされつつあった<sup>73</sup>」。

## 光と闇

シャンタルの光は、死にゆくシュヴァンスを優しく包み込んだが、欺瞞者たちにとっては耐え難いものである。この光が招き寄せる危険について、最終的に彼女を殺害することになるフォドールは、料理女フェルナンドに次のように述べる。

お嬢さんはあまりに清純だ。私たちの外側、私たちの存在の外側で、光に包まれて行き来し、呼吸し、生きている。ところが彼女は、自分でも知らぬ間に光を放ち、私たちの暗い魂を闇から引き出してしまふ。すると昔の残忍な罪が動き出し、あくびをして手足を伸ばし、黄ばんだ爪を見せるのだ<sup>74</sup>。

---

<sup>70</sup> *Ibid.*, p. 661.

<sup>71</sup> *Ibid.*, p. 743.

<sup>72</sup> *Ibid.*, p. 704.

<sup>73</sup> *Ibid.*, p. 704.

<sup>74</sup> *Ibid.*, p. 695.

『歎び』の冒頭において提示される「菩提樹の光り輝く影<sup>75</sup>」は、シャンタルと大人たちとの対峙が、まさしく光と闇のせめぎ合いであることを暗示するかのようである。同様に、自室で脱魂状態にあったシャンタルをフォードールが見つけたという出来事の回想でも、光と闇が隣接している（「窓辺には暗闇が押し寄せ、半開きのドアの向こうでは、廊下が明かりで輝いていた<sup>76</sup>」）。さらにシャンタルの父は、8月の太陽を不快なものと感じ、それを避けるために「朝から晩まで錠戸を閉ざしていた<sup>77</sup>」。

『欺瞞』から続く一連の物語は、光と闇の強烈な対比のうちに幕を閉じる。『歎び』の第二部第四章では、フォードール、父、祖母、そしてラ・ペルーズとの対峙によって疲弊したシャンタルが、寝室でひとり祈りに没頭し、忘我状態のうちに迸り出る光明に包まれる。自身の無力さの確信を通して主との合一を感じとった彼女は、「放散しているその光を愛情を込めて吸収し、その光の束を自分の存在のただ一点に集中させていた<sup>78</sup>」。そのときシャンタルは数時間後に迫った死を予感するかのように、ゲッセマネの園のイエス・キリストに自分を重ね合わせ、続いて、イエスにとってのユダに相当する人物としてセナーブルを見出す。

セナーブルによって恍惚状態から引き出されたシャンタルは、この神父との対話を経て、最終章である第五章においてフォードールの手で殺害される。ロシア人の運転手フォードールはシャンタルの寝室に忍び込み、彼女を拳銃で殺害した後、自殺を図った。異変に気づいて駆けつけた料理女フェルナンドがドアを開けると、寝室は光に包まれていた。一方、彼女についてきたセナーブルが佇む階段では、「闇が再び深くなったようであった<sup>79</sup>」。そして部屋に入ったセナーブルは「耐え難い光を浴びて立ち尽くした<sup>80</sup>」。彼はすぐそばに横たわるシャンタルの遺体を探すも、そのときすでに眼が見えなくなっていた。

## 結び

第一次世界大戦期の新聞等が蔓延させた虚偽や、共和政を支持する 1920

---

<sup>75</sup> *Ibid.*, p. 600.

<sup>76</sup> *Ibid.*, p. 636.

<sup>77</sup> *Ibid.*, p. 697.

<sup>78</sup> *Ibid.*, p. 752.

<sup>79</sup> *Ibid.*, p. 793.

<sup>80</sup> *Ibid.*, p. 795.

年代のカトリック知識人たちの欺瞞は、ベルナノスに言語の喪失の意識をもたらした。それは彼を言葉の探求へと導き、その結果、複数の文学テキストが生み出された。その状況は、論戦文『月下の大墓地』（1938）において次のように述べられる。

しかしまさしく、幼年期の名において語れるものではない。そのためには、幼年期の言語で話さなくてはならないだろうから。それは、あの忘れ去られた言語である。それは、まるでそのような言語が書かれえたかのように、かつて書かれたことがあったかのように、愚かにも私が、本を書き続けながら探している、あの言語なのである<sup>81</sup>。

「幼年期の言語」は「忘れ去られた言語」であるため、現実世界において容易には見つからないが、ベルナノスはそうした言語のこだまを、ジャンヌ・ダルクやテレーズ・ド・リジューの言葉に聞き取った。彼の文学テキストにおいて、裁かれるジャンヌや聖女ジャンタルの声が大人たちの言葉によってかき消され、沈黙に帰することは、この作家の悲観的な眼差しを反映しているだろう。それでもベルナノスは、本物の人間的な言葉を探求する姿勢を貫き、最晩年には、コンピエーニュ・カルメル会十六殉教修道女の歌声に最後の文学作品を捧げた<sup>82</sup>。それは、1794年の恐怖政治のもと、棄教を拒んだ修道女たちが、恐怖心を克服して、断頭台で命尽きるまで響かせ続けた歌声であった。

---

<sup>81</sup> Georges Bernanos, *Les Grands Cimetières sous la lune*, EECL, p. 355.

<sup>82</sup> ドイツのカトリック作家ゲルトルート・フォン・ル・フォールは、コンピエーニュ・カルメル会殉教修道女を題材として、中編小説『断頭台の最後の女』（1931）を出版した。その映画化のためにレイモン・ブリュックベルジェがシナリオを執筆した。ベルナノスはチュニジア滞在中の1947年から翌年にかけて、このシナリオのための脚本を執筆した。1948年に入って肝臓の病に倒れ、死の予感に抗いながら3月に脚本の草稿を完成させた後、7月5日にパリで没した。1949年にアルベール・ベガンがベルナノスの草稿を発見し、手を加え、『カルメル会修道女の対話』という題名を付してスイユ社より刊行した。